

「2024年度インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学理学部1年 柘植 真琴

私は、中学生の頃に東南アジアを初めて訪れて以降東南アジアの雰囲気、文化、食事などがとても気に入り将来は東南アジアで生活したいという夢を持つようになった。また、私は霊長類研究に非常に興味があり、実際に霊長類が生息している熱帯地域での研究も夢の一つであるため、大部分が熱帯である東南アジアで生活しながら霊長類の研究をすることが現在の自分にとって大きな目標である。そして去年の秋頃、私は自分の目標へのステップとして東南アジアで現地の人と同様の生活を送りながら、現地の高校の日本語の先生を補助する「日本語パートナーズ」というプログラムに応募した。最終的に内定を頂き今年の秋からインドネシアで約半年間生活することが決まった。私は今回、日本語パートナーズとしてインドネシアで生活する上で必要なインドネシア語を勉強するきっかけとしてこのインドネシア大学スプリングプログラムに応募した。私は、このプログラムを通して、インドネシア語を少しでも習得するだけでなく、インドネシアでの生活を少しだけ体験することで日本語パートナーズへの心構えや準備に役立てたいと考えた。

私たち参加者は2週間、ジャカルタ南部に位置するデボックという都市にあるインドネシア大学で学習した。毎日、午前中はインドネシア語の授業を受け、午後は実際のインドネシア大学の授業を聴講したり、インドネシア大学の学生と最終日の共同発表に向けて準備をしたり、インドネシアの伝統的な楽器を体験しインドネシアの文化に触れたりした。また、放課後や日曜日にはジャカルタの中心部に行き博物館でインドネシアの歴史を学んだりショッピングモールでインドネシア料理を楽しんだりした。このような経験を通して私は(1)海外に(2)旅行ではなくこのようなプログラムで行くことの楽しさと意義を感じることができ、これからも海外プログラムに積極的に参加したいという気持ちが強くなった。

(1) まず、インターネットが発達し海外とも繋がりやすくなった現代においても実際に海外を訪れることの意義について、このプログラムを通して私が感じたことを述べたい。私は今回、ネットでは得ることができないであろう実際にインドネシアを訪れたからこそその発見や感覚を得ることができた。例えば、インドネシアがどの程度発展しているのかということを生々の感覚として知ることができた。私はこれまでインドネシアの他にも東南アジアの国を複数訪れたことがあるが、多くの場合予想よりも発展しており、さらには日本を超えるようなハイテクさを感じることもあった。一方、今回インドネシアはこれから大きく発展していく国なのだろうと感じた。大学の多くの施設には冷房がなかったし、インターネット接続もあまりよくなかった。また、交通渋滞は歩いた方が早いだろうと感じるほど酷いこともあった。さらに、私はインドネシアは若年層が非常に多く労働力が豊富なのだろうと感じた。年配の方を街や大学内で見かけることは多くなかったし、飲食店に行くと店員が多く、中には手持ち無沙汰そうにしている人もいた。これらは日本にしながら文献やデータで知るのは違う実際に自分で訪れたからこそその発見だったと思う。そして、そのような発見ができるのは刺激的で楽しいし、日本を相対化することに繋がり海外だけでなく日本をもより深く知ることができると思う。

(2) 次に、海外旅行ではなくプログラムで海外に行くことについて感じたことを述べたい。まず、日本人の私にとって馴染みのなかったイスラム教を知って、少し身近に感じられるようになったと思う。そしてそれはプログラムでインドネシア大学の学生と仲良くなりムスリムの人々と交流したからだと思う。プログラム中、イスラム教で禁じられている豚肉やアルコールを食べる機会はなかったし、ラマダンが近づくとラマダンのためのお菓子がスーパーに売られていてイスラム教がインドネシアに深く根付いている光景に驚いた。また、プログラムに参加したからこそ、共にプログラムに参加した学年や学部、興味の異なる日本人学生と仲を深めることができた。普段大学生活を送っているときは、学年・学部・興味などに共通点が多い人と接することがほとんどであるが、プログラムでは自分と背景の全く異なる人と出会うことができ、刺激的だし世界

が広がったように感じた。

このように海外のプログラムに参加したことは自分の視野や世界を大きく広げてくれたと感じる。2 週間だけでは知ることのできなかつたインドネシアの側面も多々あると思うので、日本語パートナーズとしてインドネシアを再訪することがとても楽しみだ。このプログラムを通して、自分がこれまでに描いていた将来設計への思いがさらに強くなったと思う。